治、多畑宗哉、高井泰令、堀井政吉、堆朱楊成、梅澤隆眞諸氏）は、其の非行を覺りて、今回正木美術學校長を介して、衷心謝意を表明し、二月六日上野精養軒に會合して舊交を暖めたれば、六角氏も同校長の保證に依り、之を誠意に出でたるものと寛容せられ、茲に事件の圓滿なる解決を見たるは、漆藝發達の爲洵に幸慶に堪へざるところなり。

（『東京美術学校校友会月報』第二十八巻第一号）

なお、この事件の遠因は紫水と辻村松華の対立にありと見る向きもあり、そのような報道もなされたが、松華は事件の最中に死去した。昭和五年十一月六日には紫水の楽浪漆器研究成果の一つ「暁天吼号之図漆器手箱」（第十一回帝展出品作）に帝国美術院賞が授与された。

### ⑩ 唐宋元明名画展覧会

昭和二年十月二十八日、正木直彦校長は外務省対支文化事業部の用務を帯びて、本校書記兼文庫主任北浦大介、帝室博物館美術部長溝口禎次郎、漢学者田辺為三郎（碧堂）らとともに支那へ向けて出発した。他に画家渡辺晨畝が先発して北京で一行を迎えた。北浦は正木の補佐役として随行したことが左記の上申書控（「昭和二年職員関係書類（庶務掛）」）によって分かる。

案　支那出張ノ件上申

東京美術学校書記北浦大介

今般小官支那出張ヲ命ゼラル、ニ付テハ渡支ノ上親シク多数支那美術家及碩学名士ノ輩ニモ接見シ日支両國美術上ノ親善發展ニ盡力致度及ブ限リニ於テ支那古美術並現代美術ニ就キテモ調査視察シタキ希望ニ有之滞支中ハ非常ナル多事多忙タルベキヲ豫想サレ候　就テハ右ノ者ヲ隨行者トシテ帯同シ彼地ニ於テ日々逢着スベキ事故ニ際シ幇助者タラシメ度候ヲ以テ同人ヘモ支那出張ノ御発令有之度此段上申候也

年　月　日　　学校長

文部大臣宛

追テ出張期間ハ一箇月餘ニ渉ル見込ニシテ旅費ハ外務省對支文化事業費ヨリ支給サル、見込ニ候

正木らの旅行は東方絵画協会役員としての任務を帯びたもので、最大の目標は第五回日華聯合絵画展覧会（北京）の実現を図ることであった。一行の足跡は正木の『十三松堂日記』によって把握することができるが、彼らは十月二十九日に下関を出港し、翌三十日釜山入港。十一月五日まで朝鮮各地の遺跡や古美術品を見学し、翌六日奉天着。七日北京に着き、遺跡や美術品を見学したり、東方絵画協会員たちとの交流を深めたりし、特に正木は同会の事業の障害となっていた金開藩、周肇祥の対立の調停につとめるなどした。同月二十二日には天津へ行き、同様に見学、交流を行い、十二月七日に帰京した。正木の「支那旅行談」（『東京美術学校校友会月報』第二十六巻第八号）を読むと、彼が今回の旅行に少なからず感銘を受けた様子が判る。彼は大村西崖の東洋美術史研究や中国旅行を積極的に支

援しただけでなく、もともと彼自身も東洋美術史に深い関心を持っていたので、実際に多くの遺蹟や作品を見ることができたのは大きな喜びであったに違いない。

この旅行の結果、外務省対支文化事業部の後援により昭和三年秋に御大典奉祝の意味を込めて東京府美術館で唐宋元明名画展覧会を開催し、同時に東京帝室博物館でも唐宋元明の名画を陳列する計画が持ち上がった。こうした計画が生まれた一つの原因は、北京画壇における金、周間の対立が解けず、聯合展が開催できなかったことであるが、旅行に溝口禎次郎が加わっているところを見ると、正木らの脳裏には唐宋元明名画展の計画が早くから萌していたのではないかと思われる。

展覧会計画が決まるや日中双方からできる限り多くの名品を集めるために、まず同年五月に本校教授結城素明、貴族院議員・前支那大総統府顧問・中将坂西利八郎および渡辺晨畝が中国へ出品勧誘に赴き、「大連では先づ肅親王に會ひ、それから奉天、天津、北京、青島、上海から長江筋を巡つて普く同時代〔唐、宋、元、明時代〕の名作を求め、七月中には歸國」（同年六月一日『大阪朝日新聞』所載「大連特電三十日発」の素明談話）という旅程で精力的に交渉を進め、一方、国内では正木や北浦が中心となって出品勧誘に奔走し、準備が整ったところで次の役員会が組織された。

唐宋元明名画展覧会

会　長　公爵　近衛文麿

副会長　伯爵　清浦奎吾

委　員　正木直彦　坂西利八郎　小堀鞆音　渡辺晨畝　小室翠雲　川合玉堂　荒木十畝　横山大観　菊池契月　竹内栖鳳　結城素明　都路華香　溝口禎次郎　山本春挙　下村観山

事務所　東京美術学校内文庫

北浦大介は委員には任命されなかったが、事務所が本校文庫に置かれた以上、彼が実務の大半を担当することになった。「陳列品北京百十二點、天津八十二點が十四日神戸の港〔入〕の天津航路南米丸で運ばれ、十五日東京美術學校文庫主任北浦大介氏がわざ〳〵來神して午後五時四十分神戸發列車で東京へ輸送した、十七日荷を解いて陳列に取掛る筈である」（十一月十六日『時事新報』）という記事などを見ると、その活躍ぶりが忍ばれる。こうして中国側の積極的な協力により、名品が多数到着したが、それに前後して関晃鈞、金開藩、熙銓、闕鐸、王一亭（南方代表）、張弧（北方代表）、方若その他多数の蔵幅家、学者、画家たちが来日した。劉驤業が宣統帝所蔵の黄筌筆「柳塘聚鳥図巻」「唐人遊猟図巻」および李公麟筆「五馬図巻」を携行して来て日本人を驚嘆させたのもこの時であった。

唐宋元明名画展覧会は昭和三年十一月から同十二月にかけて東京府美術館で開催され、同時に帝室博物館でも名画の展示があり、ここに日中両国協力による空前絶後の大名画展が実現した。会期中、正木は『東京朝日新聞』（十二月十五、十六、十八日）に「支那古名画」と題する論説を寄稿し、この展覧会には唐、宋、元、明の著名な絵画が大体集まっており、このように一度に多くを展観するのは日支両国とも未曾有のことであって、双方ともに新発見が多く、画期的な催しであることを強調しているが、確かに東洋美術研究の進展に大きく寄与するものであったと言える。その模様は『唐宋元明

名画大観』（昭和四年。東京美術学校文庫内唐宋元明名画展覧会・代表北浦大介編。大塚巧芸社）によって知ることができる。左記は同書の正木の序文である。

序

唐宋元明名畫展覽會の主催に係る支那古名畫展覽會は昭和三年十一月二十四日より十二月二十日に至る二十七日間東京府美術館に開催したり　本會は中華民國蒐集家の藏弆に幷せて古來我邦に傳存せる諸家收藏の寶繪を始とし近時流傳の名蹟に至るまで凡五百餘點之を一堂の裡に展列して一般の鑑賞に供し又帝室博物館に於ては御物及社寺國寶中の唐宋元明四朝の名蹟總て二十八題六十三點を陳列し本展覽會と連絡して同時に公開展觀に供したり　因て想ふに隋唐以來我邦支邦と交通してより千三百年此間支那繪畫の我邦に傳來せるもの幾許なるを知るべからず　就中宋元北宗院體畫の傳來最も多く彼土には却て逸傳せるもの尠からず　之に反し支那には元明南宗士夫の畫多く傳襲して我邦には其畫蹟を見ること希なりしが這回の展覽會を機會に兩國の收藏家は各其淸閟を開き希有の唐蹟を始として彼我合拍長短相補ひ一大觀を現出せることは實に空前の盛事にして斯界の慶賴何事か之に加へんや　此展覽會の爲に來朝せる彼土の人士は我邦に宋元名畫の多數に重襲寶護せらるゝに驚き我邦の人士は元明の劇蹟を親睹して多年の渴望を鑒したるが如し　是に由て之を觀れば此企劃が我邦文化の進展に寄與したる効果の遠且大なるべきを信じて疑はざるなり　今列品の多數を珂羅版に付し唐宋元明名畫大觀と名づく　此盛事を記錄して後に傳へんが爲のみ

唐宋元明名畫展覽會委員　正木直彦識

なお、同書の豪華版が台北の成文出版社有限公司から同じ年に発行されている。

### ⑪ 工芸指導所の設置

昭和三年三月三十一日の官報で、各種工芸産業の改善発達を図るための工芸指導所（商工省管轄）の設置が公布され、同年十一月三十日、仙台に国立工芸指導所が開所した。初代所長となった国井喜太郎（昭和十八年三月辞任して大日本工芸会理事長に就任）は、同所の方針について「工藝の科學化、工藝の大衆化、工藝の輸出化の三大方針を以て臨んだ」と記している（「工芸指導所の歩んできた道」『工芸ニュース』第十七巻第二号。昭和二十四年二月五日）。この三大方針に基づいて、帝展第四部が開設され商工省主催の商工展のあり方が批判されるなか、工芸指導所では量産できる日常の工芸品を研究して工芸の振興を図り、また、粗製濫造と批判される輸出品の雑貨の意匠を研究し、輸出工芸の振興を図るべく活動を続けた。

本校工芸部の教官は工芸指導所の開所には参画していないが、鋳造科の杉田禾堂講師が初期から第二部（金工）長をつとめた。所長の国井は本校工芸部教官と商工展審査をはじめ、様々な場面で連携をとり、工芸の発展に尽力した人物である。鋳造科教官の高村豊周も連携を保った一人で、卒業生に工芸指導所への就職を勧め、その結果、近代デザイン運動の担い手の育成に一役買った。